



兵庫県被団協主催 兵庫県が後援 **ヒバクシャ国際署名推進のつどい** **100人を超える出席で熱い盛り上がり**



◇国連軍縮週間の初日の10月24日、「ヒバクシャ国際署名 推進のつどい」が行われ、県下各地から100人を超す方が参加。用意した資料、椅子が足りなくなるほどの盛況でした。兵庫県被団協が主催、兵庫県が後援しました。◇冒頭、被団協岡邊好子理事長が、ご自身の被爆体験を紹介し、「被爆者だからこそたくさんの人と知り合いになり、90歳を超える歳まで核兵器廃絶の意義大きい活動ができて大変ありがたい」と開会のあいさつ。芦屋市の伊藤市長の連帯のあいさつ（写真）のあと、国際署名キ

ャンペーンリーダーの林田光弘さんが記念講演しました。

◇林田さんは、「安全保障の論理」から「人道の論理」への価値観の転換。それは「原爆の被害とは一体なんだったのか？」を追求し続けてきたなかで獲得された。署名運動は「被爆体験を考え、向き合い、繰り返さない」対話の運動。社会の「あたりまえ」を変化させたのは市民の活動。この運動は世界で、また若い世代のなかで、次々と新たな工夫、イニシアティブで、豊かに広がっている等々、多くの人々との交流の経験を重ねて語りかけました。特に、全国の青年の創意に満ちた活動の紹介は、参加者に強い印象を残しました。



◇交流発言では、**創価学会兵庫青年部長の天野伸夫氏**（県内で9300筆、全国で25万2千筆の到達。10月



には、SGIとしてカザフスタンで原爆パネル展を行い、これまで21か国91都市で巡回展を行った）、**新婦人兵庫県本部平和部長の垣本千里さん**（兵庫県10万目標で5万近い到達。各地の支部・班で「平和カフェ」で原爆写真展をして署名、甲子園球場前で署名して反響、川西市議会に「禁止条約の日本政府への意見書」請願し採択させた、など多彩な活動を紹介）、**神戸医師協の青年・松本昌之さん**（世界大会で被爆者の話を聞いて署名の意義を痛感。職場で5000筆目標で9割ほどの到達を作っている）、**ヒバクシャ国際署名をすすめる高砂の会事務局長の菊本睦人さん**（市内の桜まつりなどのイベントで100~200筆の署名。県内で唯一署名していない市長に働きかけなんと賛同を取りたい）、**県保険医協会副理事長の加藤擁一さん**（8000人会員に署名の取り組みを訴える文書を発行。署名用紙を1万枚取り寄せ活用する計画だ）、等それぞれに特徴のある取り組みが報告されました。**コープこうべ**（独自に署名用紙を作り全店舗、組合員に届け現在、約7万筆の署名）、**宝塚市、西宮市**（受取人払い封筒の署名用紙を作成し市民に届けている）の文書発言も紹介された。

◇「つどい」には、被爆者援護施策を担当し知事の顔写真入りポスター、署名用紙の作成、今回の集会への後援などで役割を果たした兵庫県疾病対策の山下課長はじめ、川西市長、三田市長、宝塚市長、尼崎市長、西宮市長、宍粟市長、朝来市長、洲本市長、淡路市長、猪名川町長などから、「私たち一人ひとりに何ができるのか、市民のみなさまとともに考え、着実に歩みを進めてまいります」（宝塚市長）などのメッセージが寄せられました。署名運動のための会場募金が24,800円寄せられました。